

展望

# 結句のリアリティー

柴田佳美

年齢を重ねるごとに時間の経過が身に沁み  
ようになってきた。秋には特にセンチメンタル  
になる。

おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く  
音な添へそ野辺の松虫

『源氏物語』『賢木』

野宮の別れで、六条御息所が詠んだ歌であ  
る。このように思いを表現したいけれど、ま  
ず何をどうすべきか。示唆を与えてくれる文  
章に出会った。

『歌壇』六月号、桑原正紀の連載「ようこ  
そ、歌の世界へ」の第十八回「結句の大切  
さ」だ。この中で「常識的な予定調和に陥ら  
ない独創的・個性的な取め方は、目標として  
常に定めておくのがいいでしょう」と述べる。

むらさきの秋果を盛りて籠あれど明日と  
いふ日はわが死後ならむ 小中英之

この一首についての「小中さんは死の気配  
や予感に敏感な感性を示した歌人で、この歌  
の結句の予感もリアリティーに満ちて心に迫  
ってきます」という鑑賞に注目した。さらに、  
「自分が感動した歌を常に心に置いておくこ

とは大切です。そして、一首をいかに着地さ  
せるか悩んだら、先例をいくつか思い出し  
みることをお勧めします」とつながる。

なるほど、思えばわたしが心に置いている  
歌の中に、結句が印象的な三首がある。

古畑の岨（しづ）の立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声の  
すき夕暮れ 西行『山家集』

見下しの棚田の面に浮苗は片寄りにけり  
日本の平和 宮柊二『日本挽歌』

火の剣のごとき夕陽に跳躍の青年一瞬血  
ぬられて飛ぶ 春日井健『未青年』

近刊では、大松達知『ばんじろう』に注目  
した。

「十九歳のときに『コスモス』に入会して  
から、三十三年を超えた。多くの方々と出  
会い、多くの方々とはもうお会いできなくな  
った。そんな感懐をもらす年齢になったの  
だ」と述べる「あとがき」のその「感懐」に、  
読者の個々の時間に関する思いが共鳴する歌  
集であった。

このあとの八時間後に父逝くと知らずひ  
とりの餃子を食べた

百円で買った定規の目盛さえ、信じるこ  
とは世界のはじめ

治つたらどこか行きたいところある？ 訊  
いたとき父の目を見なかつた

とんかつに添えられているひとやまの、  
いふなれば傷だらけのキャベツ

一首目、餃子の現実感が悲しみを際立たせ  
る。二首目、定規から世界の共通認識を改め  
て思い「世界のはじめ」と収める。三首目と

四首目、今の時間を、自然で生きた血の通っ  
た言葉で紡ぐ。

次に、富田睦子の「声は霧雨」から引く。

うっそりとこころ離れば伝えざる言葉を  
夜の川に棄てにゆく

つるつるの枝のあいだを吹き抜けるふゆ  
のはじめの風のゆびぶえ

ひとりしか産んでませんが母親の代表の  
ごとイイネを捺せり

母子手帳のうすきカバーに透けているか  
つて住みたる町のひとつが

一首目と二首目、表層の描写からふと解き  
放たれた結句。三首目と四首目は、子育ての  
中のひとこまを切り取って収めている。

直接気持ちを表す言葉で結句をまとめるの  
ではなく、挙げてきた歌のように、具体的  
イメージが浮かぶ結句で表現をしたい。